

「生物文化多様性」…生物と文化の多様性 考えるバイラテラルアプローチ

敷田麻実（北海道大学観光学高等研究センター）

1 生態系と文化

今世紀に入って、生態系の持つ価値は「生態系サービス」として位置づけられた。もともと生態系は「財」として固有の価値、「存在価値」を有すると考えられていたが、「Millennium Ecosystem Assessment」では、生態系を人が利用する際に生ずる価値を生態系サービスとして明確にした。さらに同アセスメントでは、光合成や土壌形成など生態系サービス全体を支える「基盤サービス」、食糧や木材などを提供する「供給サービス」、気候調整など環境を維持するための「調整サービス」、そしてレクリエーションや教育などの精神や審美的な利益を提供する「文化的サービス」の4つに分類している。

このうち供給サービスや調整サービスは、資源利用や気候調節などの具体的な便益であり、私たちの生存に欠かせない。一方、生態系サービスの中で、非物質的なものが「文化的サービス」として位置づけられている。自然を楽しむエコツーリズムや環境教育がその典型例である（写真1）。この文化的サービスは、

個人にとって便益が認識しやすい身近な生態系サービスである。

また、地域固有の生態系との関わりから生み出される文化は、人が生態系を利用する際の行動にも影響する。そのため文化の存在を前提としない生物多様性や生態系サービスの議論は不可能である。

ここでいう文化とは、人が生態系サービスを使うために生態系に働きかける際に生ずる、生態系との関わり、プロトコルである（図1）。また伝承や共有されるだけでなく、建築物などのモノに変換され、社会を形成する資産となっている。

2 生物も文化も多様であるという発想

生態系サービスとしての文化的サービスは重要だが、文化そのものに対する注目が近年高まっている。2005年にはユネスコ総会で「文化的表現の多様性の保護と促進に関する条約」が採択され、地域の固有文化の重要性が示された。またUNEPとユネスコが開催した円卓会議「持続可能な開発のための生



写真1 豊かな生態系を楽しむエコツーリズム

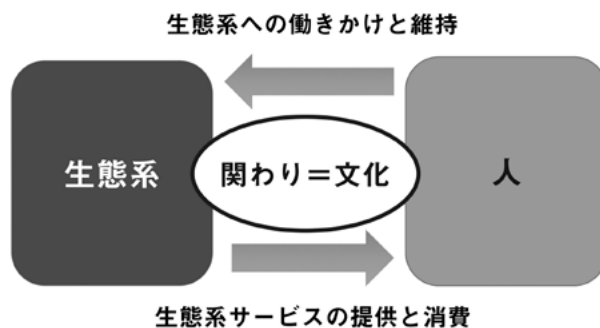


図1 生態系との関わりから文化が生ずる

物多様性と文化多様性」では、フランスのシラク大統領（当時）が、文化は経済・環境・社会と同等の重要性を持つと発言している。

その一方で、グローバル化の影響による文化の均一化への危機も指摘されている。ユネスコによれば、世界で使われている約6000の言語の43%が消滅の危機にある。固有の言語や伝統的知識の維持は、地域や社会の固有性の確保のために重要であり、それを失うことは民族や集団のアイデンティティの喪失につながる。

こうした言語を含む多様な伝統文化の維持のためには、地域生態系の多様性が欠かせない。言語や伝統文化などで、生物多様性と文化多様性の関連が示唆され始めている。一方、

1988年にブラジルのベレンで行われた「国際民族生物学会」では、それが「生物文化多様性 (Biocultural diversity)」として明確に示された。それ以降、研究者も徐々に注目し始め、①言語と生物多様性、②生物文化多様性の評価、③生物文化多様性の喪失の3テーマで主に研究が進められている。

しかし、生物と文化の両多様性を研究する分野横断的な考察が必要であり、多くの研究が行われているとは言えない。指数的に論文数が増加している「持続可能性」に比較して、まだまだ研究は端緒に就いたばかりである(図2)。また、今までの研究対象は、伝統文化と生物多様性の関係が中心で、現代文化への言及がほとんどなかった。そのため、都市の生物多様性や現代文化における文化多様性は議論されずに現在に至っている。

3 都市と田舎をつなぐ方法論としての示唆

生態系と文化を同時に考える場合でも、生物と文化のそれぞれの多様性にだけ注目してしまうと、生物多様性はいわゆる「田舎(非都市部)」が高く、逆に都市は自然が少ない人工的な空間である。また、都市では現代文化が活発に生成され、新たな文化多様性が生じている。伝統文化をどうにか維持している田舎の状況とは対照的である。

都市公園などの都市内生態系を除き、都市は多くの生態系サービスを田舎から得ている。都市の「内なる自然」は最小化し、「外なる自

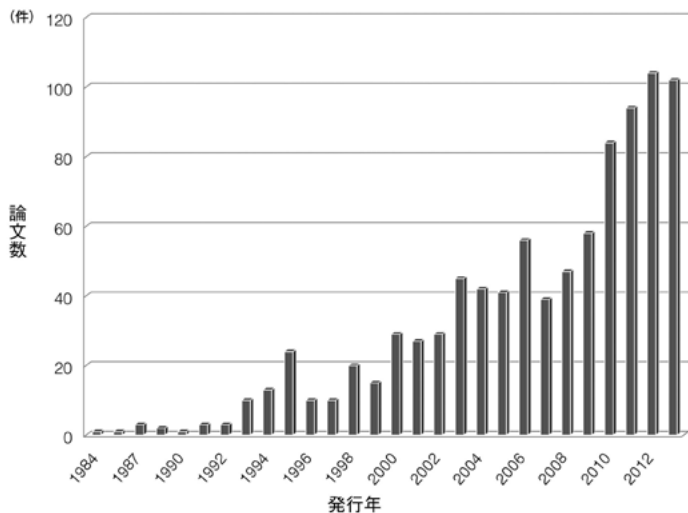


図2 生物文化多様性に関する論文数の推移 (注: 当該分野に関係する論文を収録していると考えられる科学文献データベース (Sciadirect, ProQuest Research Library, Web of Science, Sociological Abstract) を検索した)

然」を安く手に入れて経済発展を遂げてきた。さらに近年は、現代的な文化創出と多様性を基盤とした「創造都市モデル」が主流である。そのため、文化多様性と創造性に富み、都市内自然を持つ都市と、伝統文化と生物多様性保全を担われる田舎との間に「乖離」が起きている(図3)。

しかし世界人口72億4400万人の54%が都市に居住し、2050年には66%が都市生活者になると言われる中、都市が田舎から資源を調達して効率的に経済的利益を確保し、逆に資源を都市に提供して田舎を維持するモデルは失われつつある。そのため「新たな田舎像」が必要になっている。そこで、田舎が主に担ってきた生物多様性の維持と、都市の持つ文化多様性および現代文化の創出を、図3の矢印のように結びつける工夫が必要である。その点で、生態系と文化の相互作用を重視する方向性や指標としての生物文化多様性に期待できることは大きい。

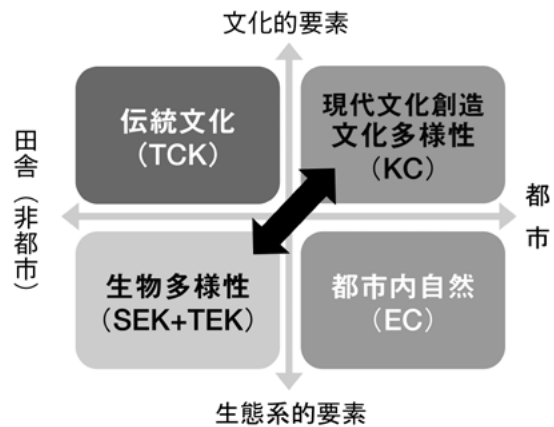
4 野生生物保護管理への示唆

さて本学会のテーマである野生生物に話を戻せば、野生生物は従来、生態系サービスの中でも供給サービスを生み出す「資源」だった。私たちは食料や毛皮など、生活の役に立つものを得るために野生生物を利用してきた。しかし、農耕や家畜生産などが普及し、野生生物を直接消費対象としない現代社会に移行すると、野生生物は鑑賞や管理の対象に変化

した。そのため人々の関心は、資源としての供給サービスから、より豊かな社会を実感するための「文化的サービス」に移り始めている。エコツアーや自然体験だけではなく、野生生物を模したデザインやキャラクターは、野生生物からイメージを取り出している。それは現代社会にとって重要な、立派な文化的サービスである。

このように文化的サービスへの関心が高い社会状況では、野生生物の保護管理は「自然科学の問題」に限定して考えることができないうとしても、「問題が解決しない」状況を生む。確かに野生生物そのものを扱うのであれば(自然)科学的アプローチが優先されるが、野生生物と社会の関わりを考慮すれば、その関わりである「文化」に関与しなければならぬだろう。つまり、文化の存在を前提としたワイルドライフマネジメントが必要になってきている。

そこでこの特集では、生物多様性が文化多様性に貢献することを計測する試みとして、疑似生物「ポケモン」の分析から、生物多様性と文化多様性を考察している。また、エコシカ対策における文化的アプローチの必要性を提案した。こうしたフレームワークを基に、自然科学としての生態学的なアプローチだけではなく、文化的なアプローチも取り入れた、野生生物と社会の新たな関係構築のためのパラレルなアプローチ、生物文化多様性の活用を提案したい。



SEK=scientific ecological knowledge TCK=traditional cultural knowledge
TEK=traditional ecological knowledge KC=knowledge creation EC=ecosystem creation

図3 生態系と文化に対する地域の関わり関係



数田麻実 (しまた あさみ)

石川県加賀市生まれ。高知大学農学部卒業後、石川県水産課に15年間勤務。その間に豪州ジェームズクック大学大学院に留学、帰国後金沢大学大学院環境科学研究科で博士号を取得。1998年に県職員を退職し全労工業大学教授を経て、2007年北海道大学観光学高等研究センター教授に就任、現在に至る。2006年から2011年まで野生生物保護学会会長。専門は地域マネジメント、地域人材育成、地域資源戦略(エコツーリズム等)。